

「時空言語学」の創成：地理と歴史を融合した言語の変化と発展への新たなアプローチ

	研究代表者	国立民族学博物館人類基礎理論研究部・教授 菊澤 律子 (きくさわ りつこ) 研究者番号：90272616
	研究課題情報	課題番号：24K23937 研究期間：2024年度～2030年度 キーワード：言語変化、時間軸と空間軸、地理情報システム、言語データと非言語情報

この国際共同研究の重要性・面白さは何か（研究の目的と意義）

●言語の変化を時間と空間の両方の側面から追跡する新たな研究分野を創成する
 言語は時間とともに変化する。現在地球上に存在する7,000言語は、その変化の結果である。言語変化に関する包括的な知見は、人類の歴史や多様性の理解につながり、国際理解と社会的共生の基盤となる。これまでの歴史言語学では、共通の祖先から発達した言語間の系統関係、すなわち時間軸に沿った発達の解明において成果をあげてきた。しかしヒトは、空間を移動して拡散し、集団と集団の接触が起こる。そのような動きもまた言語変化に大きな影響を与える。本研究では、時間軸からみた分析結果を空間移動に当てはめるこれまでの方法を逆転させ、空間的な関係から時間的な変化につなげる方法を切り口とした新しい言語変化の分析方法の確立をめざす。これにより、これまで方法論上の制約から対象とならなかった、語族や空間を超えた言語の関係、孤立言語等の発達経緯の分析も可能になる。そのために、①地理情報システム（GIS）を利用したデータベース構築による研究材料提供と②データベースを用いた理論面でのインスパイアという二段構えで、新分野創成を実現する。

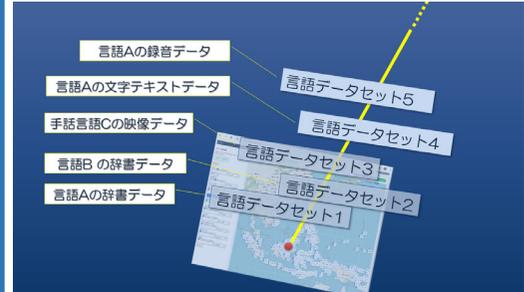


図1 地点情報を利用して異なる言語データをつなげる

構築することで、質的には、空間や時間・言語的特性を横断する、量的には、これまでにない規模の、全世界の言語を分析するためのツールをつくる。

●つないだ情報に基づく理論研究から言語発達に関する新分野の創成へ

構築する分析ツールは、歴史言語学を超えた言語分析を可能にするだけでなく、言語研究および言語データのオープンサイエンス化につながる。伝統的な言語変化に関する手法に、計量言語学を組み合わせ、統計学的に分析する。これにより、非言語情報との相関を客観的に明らかにし、研究者の眼と手による分析では見えなかった要因の洗い出しが可能になる。地理的自然環境や時間距離が言語変化のパターンに影響を与えることはよく知られているが、それを客観的に数値で示すことができるようになるだけでなく、都市等の構造、考古学的資料の分布、文献学による情報や人類学的資料、話者集団の遺伝情報等と言語データを突き合わせるなど、言語を核とした学際研究の基盤を構築し、人類誌の理解と今後の期待される社会への展望につながる学問分野の基礎を築く。

●地理情報で全世界の言語のデータをつなぐ
 言語データはこれまで、特定の言語や言語グループの語彙リストや辞書などが別々に作成されてきた。また、データのタイプや構造化の方法が異なるデータを相互参照するためには、都度、作り替えが必要だった。さらに近年のAI処理の発達により、近い将来、テキスト、音声、映像間を自由に横断検索できるようになることが見込まれる。これを前提として異なる言語や異なるタイプのデータを地図上に位置づけることで縦に関連づけることができる。地図上に位置づけたデータは、必然的に世界全域にわたり横につながる。このようにして作成したデータを縦横に自在に検索できる仕組みを

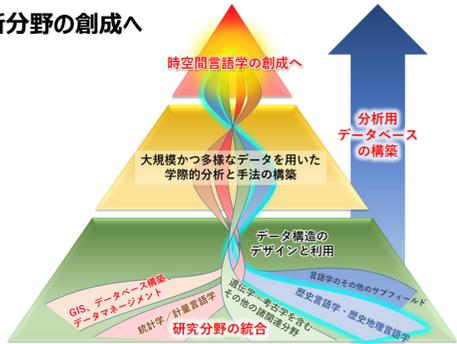


図2 言語の学際研究の積み重ねにより新分野が生まれる

誰がこの国際共同研究を行うのか（優れたグループによる国際共同研究体制）

●10カ国・12名を核とする国際チームによる

言語分析インターフェースの構築
 現在は互いに独立している各種データベースを横断検索する仕組みを作るために、大規模国際ポジトリのデータ運営や管理者、先進的な音声言語および手話言語データベースの制作・管理者、計量言語学および地理情報システムに関する国際研究拠点における研究者が協働する。途上国の研究者の参加により、多様な研究環境や文化背景に対応できるシステムを開発するだけでなく、現状で言語データが得られていない地域のデータをカバーし研究を促進する。



●日本・フィジー・米国3カ国の14名がコアメンバーとなり、ミクロとマクロ、時間と空間をつなぐ
 先行研究の実績がある国際学際共同研究チームに、本研究の趣旨を踏まえてメンバーを追加。歴史言語学、歴史地理言語学をはじめ、言語類型論、計量言語学、地理学、考古学、遺伝学、統計学等の専門家がコアメンバーとなり、研究を推進する。世界各地の若手からシニアまで幅広い層の研究協力者と共に、フィジー語300方言およびフィジー手話を対象としたミクロレベルの時空言語学分析から、より大きな言語群へ、そしてマクログループへの応用を通して方法論を発展させる。

どのように将来を担う研究者を育成するのか（人材育成計画の内容）

●国際学際研究ネットワークのノード（結節点）の役割を若手が担う

世界的なネットワーク構築には、世界各地の研究拠点で開発されたデータベースを物理的につなぐだけでなく、それらの性質を知り、利用価値と可能性を分析し、グリッドにフィードバックする必要がある。この役割を若手が担うことで、シニア研究者の具体的な研究課題に応えるデータの所在を明らかにしつつ、各自が独自の視点でデータおよびツールの見定めをする機会を持つ。これにより、伝統的な手法と新たなものを融合させた新しい視点での研究提案をする基盤となる目を養う。

●フィールドワークによる生きた言語の記述を必須

言語はデータのプロセスで多かれ少なかれ規範化され、使用文脈や使い手であるヒトから切り離されてしまうため、データのみを対象とした分析は、実態とはかけ離れてしまう危険性がある。フィールドワークによる記述研究を必須とすることで、単なるデータ収集だけでなく、言語を生きた人間が生活の場で使う有機的な存在としてとらえる基盤を形成する。生物としてのヒトが使う言語、異なる特性をもつ個々のヒトが使う言語としての視点は、非言語データとの相関性に気づくための基盤を養う。

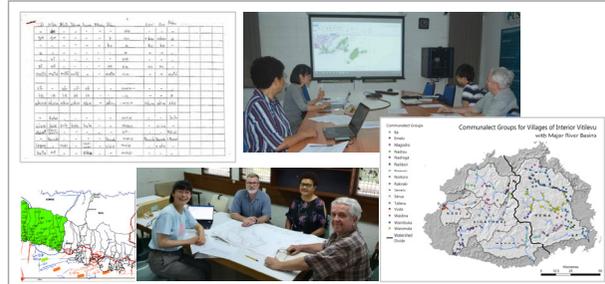


図3 フィールドデータをデジタル地図へ

●学際がデフォルトの国際研究環境と途上国でのセミナー開催

本研究に関与する若手研究者は、異なる分野間の協働が基盤である環境で研究をすすめることで、分野間の異なる視点や用語、分析手法などに常に触れ、身につけ理解する。さらに、大学生や大学院生、情報学途上国の研究者を対象としたセミナーを企画・開催することで、自身の知識を見直し、刷新・発展させる機会とする。